今年もまた、その季節になり、二人集まると、こっちでもあっちでもその話で、心配して泣くばかりで、何の方法もねえだど。

今年は、誰の娘に白羽の矢が立つのやら、寝ても眠られぬ毎日だっただど。

そんなある日、おやがっつぁまの三番娘で、年は十六、奇麗で心優しくみんなから可愛がられているおふじという娘が、

「私が、人身御供になんべ。」

と言い出したんだど。

親兄弟も大変驚いたが、おやがっつぁまは、涙をのんで、

「事が済むだどな。」

と言っただど。